

初めに角野会長の開会の挨拶があつて開宴、食後桂弁三博士、石原米太郎氏、浅田長平氏の諸先輩の有益なお話があり、次に中島省一氏より受賞者を代表して感謝の辞が述べられ、更には的場幸雄氏、嘉村平八氏の興味あるテーブルスピーチが行われた。最後に金子恭輔博士の発声にて、日本鉄鋼協会万歳を三唱し、午後8時半和気霽々の裡に散会した。

当日来賓としてお招きした先輩各位は次の通りであつた。(順序不同)

俄国一氏(欠)、桂弁三氏、金子恭輔氏、村上武次郎氏(欠)、川上義弘氏、井上匡四郎氏(欠)、黒田泰造氏(欠)、石原米太郎氏、松下長久氏、蒔田宗次氏(欠)、浅田長平氏、斎藤三三氏。

見学会 4月5日金属学会と本会と共同で、工場その他の見学会を行つた。見学先は日本鋳業日立鋳業所ほか17の工場、研究所などであり、また夜は「東京観光」を行つた。「昼の観光」は定員の関係で中止した。(詳細は6月号掲載の見学記参照)

第2回編集委員会 日時: 32-4-26(金) 9:00~11:30. 会場: 富士製鉄箱根山荘. 出席者: 佐藤理事外 15名, 報告事項: 4月号は4月18日完成発送済み, 5月号は5月15日完成予定, 協議事項: 7月号原稿選定の件一選定済み, 会誌交換および寄贈方依頼の件一日本原子力研究所との交換の外他は見合せ, 技術資料に関する件一鉄鋼技術共同研究会各部長に適宜資料の執筆依頼を, 芥川武氏に高温顕微鏡について執筆依頼のこと. 講義欄に佐藤知雄氏および松下幸雄氏に執筆依頼のこと, 6月および7月号に特別講演を掲載し, なお頁に余裕あれば技術資料として学振文献を掲載すること.

北陸支部役員改選 北陸支部ではこの程役員の改選を行つたが新役員は次の通りである。(敬称略)

支 部 長 石原寅次郎

支 部 理 事 石原寅次郎, 垣内富士雄, 菊池浩介, 斎藤弥平, 田宮鉄四郎, 橋浦彦三,

藤田輝夫, 松浦次義,

支 部 評 議 員 石原寅次郎, 岩崎航介, 大沼太吉, 垣内富士雄, 加藤純一, 菊池浩介,

斎藤弥平, 塩谷周三, 田宮鉄四郎, 内藤平八郎, 中野宏, 中路武雄,

西野十朗, 橋浦彦三, 藤田輝夫, 松浦次義, 村上明, 室町繁雄,

森棟隆弘, 養田実

日本鉄鋼協会第42回通常総会における表彰者推薦理由書

服部賞受領者

富士製鉄株式会社室蘭製鉄所

副所長 村 田 巖君

製鋼作業技術の改善進歩

君は昭和3年東京大学工学部冶金学科を卒業、直ちに官営八幡製鉄所に入り製鋼部に勤務し、昭和23年室蘭製鉄所に転じて現在に至っている。この間終始一貫製鋼作業技術の改善進歩に努めた。殊に室蘭製鉄所製鋼部長就任後は、平炉操業における燃料および燃焼法の重要性に着目し、工場全般の設備改善、技術向上に努力したことはもちろん、とくに平炉燃焼技術の進歩向上に最も力を尽し、困難な条件をよく克服して、現在の高圧冷コークス炉ガス燃焼ならびに酸素使用による平炉操業を確立した。また、鋼材の品質に関しては、とくに燃料中に含まれている硫黄の問題に着目し、昭和28年広範囲な調査研究を指導して、製鋼作業における硫黄の挙動を明らかにした。

かくのごとく同君の業績は、わが国製鋼技術の改善進歩に貢献するところきわめて顕著なるものがあり、表彰規程第三条の規定により、服部賞を受ける資格十分なるものと認める。

香村賞受領者

日本特殊鋼管株式会社常務取締役

工学士 中 島 省 一君

特殊鋼継目無鋼管の生産化に対する功績

君は昭和6年東京大学工学部卒業、株式会社吾嬬製鋼所入社、さらに昭和13年日本特殊鋼管株式会社に転じ

今日に至っている。その間終始製鋼および継目無鋼管の製造技術向上に努力しているが、その功績の主なるものを挙げれば次の通りである。

1. 昭和26年以来マンネスマン製管法による不銹鋼々管の製造に着手し、部下を統率して各種の困難を克服し、昭和29年には18・8不銹鋼々管の工業的生産に成功し、量的生産に移行現在毎月約30屯の定常生産を行っている。また現在最も製造困難とする25・20系不銹鋼の生産にも成功しているが、さらに日夜品質の改善、歩留りの向上に努力し顕著な成績をあげている。

2. ベアリングレースは、従来丸棒をくりぬいて製作していたが、これをパイプより製造する方法に早くより着目し、日本特殊鋼株式会社、特殊製鋼株式会社等との緊密な連絡の下に、日本精工、光洋精工、東洋ベアリング等諸会社において実用試験に成功し、すでに工業生産に移し、ベアリング製造法の近代化に大きな貢献をしている。

3. 機械構造用鋼管として各種強靱鋼、中炭素鋼、高抗張力鋼等の鋼管を製作し、使用先会社との緊密な連絡の下に、目的に適した高品質鋼管の生産に成功し、とくに各種自動車鋼管については、実用上遭遇した各種の事故に対処して適切な対策を施し、品質の向上を図り、一般機械工業とくに自動車工業界に寄与するところまことに大である。

君は多年特殊鋼継目無鋼管の製造技術の向上に力を致し、斯界に対する功績顕著なるものがある。よつて表彰規程第4条の規定により香村賞を受ける資格十分なるものと認める。

渡辺賞受領者

日本特殊鋼株式会社製鋼部次長兼研究部次長
工学博士 佐藤忠雄君

特殊鋼製造技術の改善進歩に関する研究

君は昭和8年東京大学工学部冶金学科を卒業、直ちに海軍航空廠に入り昭和20年鉄道技術研究所に勤務、さらに昭和32年日本特殊鋼株式会社に転じ現在に至っている。

海軍航空技術在任中は航空機用特殊鋼の物理的、機械的性質の研究を行い、合金元素の影響と熱処理法、鍛造法、製鋼法の進歩発達に寄与し、戦時中の輸入合金元素不足に対処してはその代用鋼の実用化に努め、航空機生産上の材料的困難を克服した。諸研究の中とくに疲労破壊試験による特殊鋼の材質改善はいちじるしい功績をあげた。

戦後は鉄道技術研究所にあつて、鉄道用特殊鍛鋼、圧延鋼材、鋳鋼の研究に従事し、また日本鉄鋼協会編“鋼の熱処理”の執筆、編集にしたがい、工業技術院制定規格専門委員会に委員長、あるいは委員として参画し、全期間を通じわが国特殊鋼の技術的進歩に貢献した功績はきわめて顕著である。よつて表彰規程第6条の規定により渡辺賞を受ける資格十分なるものと認める。

俵賞受領者

三菱製鋼株式会社社長崎製鋼所技術部長
工学博士 河合正吉君

(論文) 大型炭素鋼々塊のA偏析帯について

君は昭和12年東京大学理学部物理学学科を卒業し、三菱製鋼株式会社に勤務し、現在に至っている。

会誌「鉄と鋼」第42年第1号、第2号、第4号、第5号に掲載された「大型炭素鋼々塊のA偏析帯について」と題する君の寄稿にかかる一連の論文は、昭和31年中に掲載された論文中、学術上、技術上最も有益な論文と審定した。よつて表彰規程第5条の規定により俵賞を受ける資格十分なるものと認める。

協会賞受領者

八幡製鉄株式会社八幡製鉄所製鋼部第四製鋼課長
工学士 相原満寿美君

製鋼技術の進歩向上

君は昭和14年東京大学工学部冶金学科卒業、八幡製鉄所製鋼部に勤務し、爾来今日に至っている。この間君は優良鋼塊の研究を行い、また燃焼管理の推進に努め、さらに増産体制の実行に努力して、製出鋼塊の新記録を実現し、多大の功績を挙げた。いま研究業績の重なるものを摘記すれば次の通りである。

1. 優良リムド・キルド鋼製造に関する研究
2. 酸素製鋼法の研究
3. 平炉バーナーに関する研究
4. 平炉における燃料の合理的な使用、燃焼管理方式の研究による燃焼基準の確立

なお君はこの外に製鋼技術に関する数種の研究に専念し、作業改善、生産能率の向上に努めており、わが国製鋼界に貢献するところはなほ大なるものがある。よつて君は表彰規程第7条の規定により協会賞を受ける資格

十分なるものと認める。

協会賞受領者

住友金属工業株式会社鋼管製造所
技術部研究試験課副長

工学博士 岡本豊彦君

鋼材圧延ならびに鋼管の製造に関する研究

君は昭和17年東京大学工学部機械工学科卒業、ただちに住友金属工業株式会社の研究部に勤務し、主として金属材料の塑性加工ならびに材料試験関係の業務を担当してきた。現に鋼管製造所研究試験課副長として独自の研究に従事するかたわら後進の指導にも当たっている。

その間圧延製管および材料試験の方面にて多大の研究業績をあげてきた。とくに鋼管の冷間引抜に関しては独自の分野を開拓し、従来この方面の研究の盲点となつておつた所を理論的にも実験的にも明らかにし、軟鋼管の冷間引抜に関する研究の題目により工学博士の学位を受けた。さらに材料試験の方面で実用的に有益なる業績を残し、会社に貢献したる外、JISの機械試験法の規格改正に際しても適切な意見を提出した。また鉄鋼協会講演会および同協会圧延理論分科会ならびに同協会の参加する塑性加工講演会等において終戦以来30回の講演または発表を行い、広く工業界の発展のために努力した。

同君の研究は単に鋼管製造の技術のみでなく、わが国における鋼材の熱間および冷間加工の技術進歩に多大の貢献をした。よつて表彰規程第7条の規定により協会賞を受ける資格十分なるものと認める。

協会賞受領者

日本鋼管株式会社川崎製鉄所製鉄部長

工学士 栗山俊治君

鋳鋼製造および附帯作業の技術改善、 ならびに作業管理方式実施の功績

君は昭和8年東京大学工学部冶金学科卒業、ただちに日本鋼管株式会社に入社し、今日におよんでいる。その間

1. 昭和22年には大戦直後荒廃した平炉工場の再建に努力した。また平炉築炉法の改善、重油専焼平炉の完成、溶銑の長距離輸送の成功、計器操業の研究確立、その他厚板用大型扁平鋼塊にて良好なセミキルド鋼の製法完成、また鋼板の製造全工程にわたる総合的な技術管理方式を実施して質の向上、安定を計り、経済的製造法確立に大なる効果を挙げた。

2. 製銑関係においては、昭和29年斯界減産時には辛苦研究の末、高炉における低コークス比操業を遂行しその後、昭和30年夏以後の増産期には炉容積に比し、画期的な出銑量を確保した。この間、作業標準および品質管理を確立し、とくにトーマス銑の低硅素吹製に成功した。また高炉の短期間捲替工事を立案実行し、吹入後の操業もきわめて好調で、以後高炉操業度の新記録を樹立した。

また、焼結鉬製造設備の大改造においては幾多の改良考察を計画実施した結果、パレット有効面積1m²当生産量の飛躍的向上を示した。一方、コークス炉の保全に苦心し、老朽コークス炉を短期間に復旧して、良質の高

炉用コークス製造に効果を挙げた。

3. 平炉作業、製鉄作業に新しい管理技術を応用し、困難視されていたコークス炉の複雑な燃焼管理に独特の「六点管理方式」を案出し成功を収めている。

4. その他コークス炉の管理に附随して、副次発生物のタール、ベンゾール等の回収の近代化と拡張計画を実行に移し、とくにベンゾール蒸溜の際に、シクロペンタジェンを抽出し、ポリエステル樹脂用原料としての新製品に成功した。

以上の業績に示す通り、君が鉄鋼製造ならびに附帯作業技術ならびに設備の改善に努めるとともに、鉄鋼一貫作業全般にわたって総合的な管理方式を採用したことは鉄鋼技術の進歩に寄与するところ多大である。よつて君は表彰規程第7条の規定により協会賞を受ける資格十分なるものと認める。

協会賞受領者

八幡製鉄株式会社八幡製鉄所製鉄部副長

工学士 白石 芳雄君

高炉操業技術の改善および向上

君は昭和12年早稲田大学理工学部採鋳冶金科を卒業ただちに八幡製鉄所に入社、爾来高炉操業の技術改善および向上に尽瘁している。すなわち、昭和17年戸畑第2熔鋳炉において大型熔鋳炉によるフェロマンガンの吹製に成功したのを初めとして、1トンおよび3トン試験熔鋳炉の設計、建設および操業理論の考察、またカーボンブロックの製造ならびに熔鋳炉々底への築造法等に貢献したが、昭和28年第2製鉄課長就任以後生産コストの切下げ、熔鋳炉操業の改善、技術の改善、品質向上等について一貫した努力、とくに原料予備処理に全力を傾注した。このため昭和27年度のコークス比が0.871であつたものが漸次低下して31年上期には0.694という優秀な実績を示し、とくに洞岡第4熔鋳炉(1,000トン炉)では、塊操業試験の実施により、月平均出鉄量1日当たり1,227トンという日本新記録を樹立し、さらに緩風操業実施により、同炉でコークス比0.635という驚異すべき実績を挙げた。なお同熔鋳炉は31年10月24日出鉄量150万トンを突破し、さらに200万トン記録を目指している。

以上のように熔鋳炉の寿命、操業、実績において画期的な進歩を示したのは、同君の不断の努力によるものであり、わが国製鉄技術の発達に貢献するところはなほ大である。よつて同君は表彰規程第7条の規定により協会賞を受ける資格十分なるものと認める。

協会賞受領者

大阪大学産業科学研究所教授

工学士 菅野 猛君

鉄鋼業の計測管理技術の確立

君は昭和11年東京大学理学部物理学科を卒業、ただちに住友金属工業株式会社に入社、温度計測に関する研究に従事し、後転じて大阪大学産業科学研究所に勤務してよりも、計測技術の研究に専念し、その研究と実地の経験をもつて鉄鋼業の計測管理を指導した。昭和24年より、日本鉄鋼協会研究部会、鉄鋼技術共同研究会ならび

に學術振興会19小委員会の主査または委員として、つねにきわめて積極的に研究に努力し、鉄鋼業において今日みられるごとき世界水準の計測技術を確立し、またオートメーションの基盤を作り上げた功績ははなはだ大である。よつて君は、表彰規程第7条の規定により協会賞を受ける資格十分なるものと認める。

協会賞受領者

住友金属工業株式会社小倉製鉄所

研究試験課副長 工学士 橋本 英文君

(論文) 平炉の空気力学的構成

君は昭和16年九州大学工学部航空学科卒業、海軍航空技術廠、鉄道技術研究所等に勤務したが、昭和25年小倉製鉄株式会社に入り、(後住友金属工業株式会社に合併)現在に至っている。

君の研究の結果「鉄と鋼」誌上に発表した「平炉の空気力学的構成」と題する論文(昭和31年4月および10月掲載)は優秀な論文であつて、學術上技術上の進歩発達に功績あるものと審定した。よつて君は表彰規程第7条の規定により協会賞を受ける資格十分なるものと認める。

協会賞受賞者

株式会社栗本鉄工所鉄管事業所技術部長

兼研究所部長 工学博士 武藤 千秋君

高マンガン鑄鋼製造に関する研究

君は昭和8年京都大学工学部冶金学科卒業、ただちに株式会社栗本鉄工所に入社、爾来20余年にわたり専ら鑄鋼の製造に従事しているが、とくに高マンガン鋼鑄物の製造について研究を進め、科学的研究方法を十分に活用して、その溶解法および鑄造法を確立して、その品質向上および製造原価の切下げに成功すると同時に、最新の技術を卒先導入して諸種の試験方法を改良し、製品の品質管理に寄与するところ甚大であつた。

なお、これらの業績の多くは日本鉄鋼協会の講演大会において数次にわたり発表し、またその研究をまとめた論文「高マンガン鑄鋼製造法に関する実験的研究」に対しては京都大学より工学博士の学位を受けている。かくのごとく、君は高マンガン鑄鋼製造技術に対する貢献はまことに大であつて、表彰規程第7条の規定により協会賞を受ける資格十分なるものと認める。

協会賞受領者

山陽製鋼株式会社取締役製造部長

益田 義三君

特殊鋼の製造技術の普及向上

君は昭和7年秋田鉱山専門学校冶金科を卒業、昭和15年1月まで大同製鋼株式会社に勤務製鋼作業に従事し昭和15年より昭和18年まで高周波重工業株式会社城津工場に勤務、この間会社において軸受鋼、肌焼合金鋼、耐熱鋼、不銹鋼、高速度鋼その他の特殊鋼の製造を指導し技術の向上に努め、とくに高周波製原鉄から直接特殊鋼の経済的品質的製造法を確立した。また昭和18年10月より終戦まで日満電気製鋼会社に在り、砂クローム鉄鋳ならびに低品位クローム鋳石からの低炭素フェロクロームの製造ならびに前原鋳からの直接ステンレス鋼の

製造技術の向上に努めた結果、海軍の要望せる爆雷関係の部品の素材を生産し戦力増強に大なる貢献をなし、軍需大臣、海軍大臣より優良工場としての表彰をうけた。昭和 23 年 5 月より現在に至るまで山陽製鋼株式会社において特殊鋼、とくに軸受鋼の製造技術の向上改善に努力を傾注した。その間部下を指導し特殊鋼製造技術の向上に努めた結果、特殊鋼の下注鋳込法を確立し、量品質共に優良なる特殊鋼々材の製造法を確立した。

かくのごとく君の特殊鋼の製造技術の普及向上に対する功績はいちじるしく、斯界に貢献するところ大なるものがある。よつて表彰規程第 7 条の規定により、協会賞を受ける資格十分なるものと認める。

協会賞受領者

株式会社日本製鋼所室蘭製作所溶鋼工場長
工学士 守川平四郎君

製鋼作業の合理化ならびに鋼塊の歩留向上に対する功績

君は昭和 16 年東京大学工学部冶金科卒業、ただちに日本製鋼所に入社、室蘭製作所溶鋼工場に勤務し爾来一貫して製鋼作業に従事し、酸性平炉、塩基性平炉、塩基

性電弧炉による優良鍛造用鋼塊の製造ならびに大型鋳鋼熔製法の確立および改善に多大の功績をあげた。とくに戦後製鋼原材料の不足悪化に対処しては深い経験とたゆまざる研究によつて、塩基性平炉における生ドロマイト炉床の実用化、塩基性平炉による大型特殊鋼塊の製造法を確立してその危機を打開し、さらに米国 U.E 社との技術提携になる特殊鋳鋼ロールの熔製に際しては彼我の条件の相違を克服し、その熔解法の確立に大いなる寄与をなし、U.E 社製に勝る製品製造の基礎を樹立した。

また船舶用あるいはボイラープレート用の超大型厚板用の低炭素キルド鋼の製造に対しては熔解精錬造塊の各方面にわたつて最新の技術を実際現場に十分に活用して厚板用大型鋼塊の製造方法を改善し、その圧延歩留りの向上と飛躍的増産および生産原価の引下げに貢献し、厚板製造技術を世界的水準に達せしめた。とくに低炭素キルギ鋼および構造用鋼の大型鋼塊の製造に関連し種々実験研究を行いすでにその一部は日本鉄鋼協会講演大会、製鋼部会等において報告され、わが国の製鋼分野における技術の発展に貢献しその功績ははなはだ大きい。よつて表彰規程第 7 条の規定により協会賞を受ける資格十分なるものと認める。

昭和31年度 (昭和31年3月1日から昭和32年2月28日まで) 日本鉄鋼協会事業および会計報告

事業報告

I. 会議

本会運営上の会議を次の通り開催した。

1. 第 41 回通常総会 昭和 31 年 4 月 1 日
議事 (1) 理事および評議員の選挙
(2) 昭和 30 年度事業報告
(3) 昭和 30 年度収支決算報告
(4) 昭和 31 年度収支予算審議
(5) 正会員および学生会員会費値上げの件
(6) 定款変更の件
2. 評議員会 昭和 31 年 2 月 17 日
議事 (1) 次期理事、監事、評議員候補者推薦の件
(2) 昭和 31 年度事業報告、収支決算報告ならびに財産目録の件
(3) 昭和 32 年度事業計画ならびに収支予算の件
(4) 服部賞、香村賞、俵賞、渡辺賞、協会賞、各受賞者決定の件
(5) 表彰ならびに事業資金規程制定の件
(6) 表彰規程制定の件
3. 理事会 毎月 1 回、臨時 1 回、計 13 回開催、毎月の事務ならびに会計事項の審議、その他一般会務を協議処理した。
4. 編集委員会 毎月 1 回、臨時 2 回、計 14 回開催
会誌の編集方針、企画、掲載論文の選定、技術資料の蒐集、その他会誌編集に関する一切の事務を協議処理した。

5. 企画委員会 随時 7 回開催、事業運営上の諸企画につき審議立案した。

6. 支部長会議 昭和 31 年 4 月 1 日
各支部の事業状況の報告があり、協会発展に関する件、会員拡大運動に関する件、本部支部間連繫に関する事項等につき協議した。

II. 会員

本年度において次の通り会員の異動があつた。

会員別 異動	名 会 員	賛 助 会 員	維持会員		正 会 員	学 生 会 員	外 国 会 員	合 計	会 組 員 機 体 数
			員 数	口 数					
昭和31年 2月29日 現在	19	41	125	662	4774	165	0	5124	67
入 会			+51	+224	+547	+168	+ 2	+783	
退 会		- 1	- 3	- 3	-123	- 18		-150	
死 去	-1				- 11			- 12	
住所不明					- 6	- 1		- 7	
復 活					+ 3			+ 3	
転 格					+ 59 - 15	- 59	+ 15	- 15	
昭和32年 2月28日 現在	18	40	173	883	5223	255	17	5726	73

III. 役員および委員

本年度において次の通り役員および委員の異動があつた。